

純粹経験における「他者」

—初期西田哲学と独我論の問題の再検討—

Other Minds in Pure Experience? Rethinking the Problem of Solipsism in Nishida's Early Philosophy

Richard Stone (リチャード・ストーン) (早稲田大学)

個人があって経験があるのではなく、むしろ、経験がまずあるからこそ個人といったものがあると考えられる。周知のとおり、西田幾多郎はその処女作である『善の研究』においてこの立場を取ることで、独我論を避けようとした。なるほど、主客の分離にも先立つ直接経験もしくは純粹経験の中で確かめるもののみを論証として認める初期西田哲学には、確かに一見したところでは本来「自分の」経験のうちで確かめようもない他者の心を語れなくなってしまうというリスクがあったのだろう。しかし、自他の区別よりも原始的な経験層を導入し、自己と他者の認識をそこから説明することにより独我論を避けた、と西田自身は述べた。

こうして自他の区別にも先立つ「純粹経験」の立場から独我論を避けようとした初期西田哲学において、非常に独創的な他者論が展開されたということが見て取れるだろう。しかし、それと同時に、初期西田の他者論は問題含みとも言わざるを得ない。少なくとも次の三つの疑問点が考えられる。まず、自他の区別に先立つ経験層は果たして考えられるのだろうか。次に、そうした経験層があったとしても、自己と他者の区別に先立つ純粹経験そのものが他者性の抹消を意味するのではないだろうか。また、初期西田の哲学から見れば事実としてある自己と他者の区別は結局どのようにして生じるのか。

本発表では、我々はこうした疑問点を意識しながら、初期西田哲学における他者の位置づけを批判的に検討する。その為に、我々はとりわけ純粹経験における「個人」の在り方に焦点を当てる。それによって、自他の区別に先立つとされている純粹経験からどのようにして「私」と「あなた」が出てくるのかを明確にしていく。その際、我々は西田の研究断章において提案されたように、「我」と「彼」などのような、経験の持ち主を指示する言葉を仮名として捉えることで、初期西田哲学の難点とされてきた他者の心を整合的に理解しようとする。